書評

髙谷紀夫・沼崎一郎編『つながりの文化人類学』（東北大学出版会、2012）

越智　郁乃

はじめに

本書は、広島大学（1979 年～1996 年）及び東北大学（1996 年～2010 年）において研究・教育に従事された嶋陸奥彦先生の退官を記念する論集として企画されたものである。2008 年 7 月には中四国人類学談話会にて、11 月には東北人類学談話会にて各執筆者が研究発表し、その後議論を重ねていく間に「つながり」というキーコンセプトにたどり着き（p.335）、2012 年に出版された。くしくも 2011 年の東日本大震災の後、「つながり」「絆」がメディアを通じて喧伝される中、「即効性に欠ける」と批判されがちな文化人類学において、11 名の執筆者の緻密かつ堅実な長年の研究により、個人や集団を結びつける、あるいは分け隔てる様々な「つながり（relatedness）」について再考した論文集である。各執筆者が各々のフィールド社会において、何に「つながり」を見出し、どのように「つながり」を紡ぎ、それが人々の生活に何をもたらしているかを描くことで、各社会の「つながりの文化（culture of relatedness）」を具体的に明らかにしようと試みている（p.9）[1]。本稿では、序論、各章論考について紹介するとともに、概念としての「つながり」について考えていきたい。

1 序章と各章の構成

本書は以下のような構成になっている。

序章　髙谷紀夫・沼崎一郎
第一章　械闘未遂事件にみる親族の「つながり」の現在－広東省珠玉デルタの一村落の事例から－　川口幸大
第二章　台湾漢族の葬式通知にみる女性の位置づけとその変遷－父系社会の

再考―　上水流久彦
第三章　兄弟のつながりから地域社会のまとまりへ―近代沖縄における移住者の社会形成－　玉城毅
第四章　現代ルーマニア農村における家族のつながり－家畜飼育の現場から－　杉本敦
第五章　北ラオス村落社会における出産と養い－親子のつながりの持続と変容－　吉田香世子
第六章　移民家族の定住過程における社会関係－在日コリアン一世の女性たちのライフヒストリーから－二階堂裕子
第七章　うわさのコントロールによる在仏モロッコ移民と出身地との国境を越えた社会関係の変容と持続－渋谷努
第八章　ナイジェリア・イボ社会における移民組織と王制－王位を媒体とした《つながり》の構築と断絶－　松本尚之
第九章　伝統ダンス進展期における先住民と文化の関係－ユッピック・ダンスがつなぐ社会関係について－　久保田亮

編者の髙谷・沼崎は序論において、「つながり」が「まとまり」や「ひろがり」を作り出す一方で「へだたり」をも作り出すと述べる（p.10）。人々は血縁、土地、会社、言葉、信仰等々に「つながり」を見出し、「つながり」を結びつけながら、生活世界を織りなしてきた。それゆえに、「つながり」は文化人類学・社会人類学の草創期から現在まで主要な関心事である。19 世紀から欧米の社会人類学者らがアフリカにおいて親族関係（kindship）という「つながり」による「まとまり」に注目し、融合しながら分節するという「へだたり」について研究する中でリネージ理論を生み出した。一方でレヴィ＝ストロースの構造主義的親族論を基に、結婚によりもたらされる新たな「つながり」が、政治的な連帯を生み出す原動力であるとする同盟理論が見出されてきた。このようなエティック（etic）な親族理論が、アジアやオセアニアといった諸社会に通文化的に適用されていった。

1960 年代以降になると、そうしたエティックな「つながり」に対してエミ

ック（emic）な親族研究が進められていく。欧米的な親族イデオロギーを排し、それぞれの文化の文脈で再検討されなければならないという批判が起こるが、機能主義から構造主義へ、そして象徴人類学や解釈人類学という人類学理論の潮流自体が変化する。さらに、これまで対象としてきた「未開」社会の変貌と相まって親族研究が人類学に占める地位が相対的に低下したことで、先の批判を乗り越える研究は登場しなかった。しかし、1990 年代以降、人工授精や代理母などの生殖補技術の発達を用いた場合の親子の「つながり」や、「民俗観念」の変化という新たな問題群が提起された。そして 2000 年以降には、カーステンをはじめとした研究者らによる親族研究が再興している。そこでは既存の親族概念を無批判に適用することなく、人々が生きて体験している「つながり」を日常生活の文脈において記述し、エミックに分析する親族研究が始まっている（p.13）。

以上のような親族研究による個別社会内部の「つながり」に対して、社会ネットワーク研究のように移動・移住する人々の持つ「つながり」について注目しているものもある。それらの研究では、移住先の都市において表面的には母村や親族から切り離されて個人化しているように見える都市居住者が、個人的かつインフォーマルな「つながり」をいかに維持し操作しながら流動化する社会を生きて抜いているかということを明らかにしている。また、近年のグローバル化と国際的な移民の増大、さらにはインターネットや携帯電話、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）技術の発展に伴い、移民たちの社会ネットワークも複雑化している。こうした国境や文化を越えた「つながり」が、人類学の主要なテーマになりつつある（p.16）。

一方、日本においては独自の「つながり」研究が蓄積されてきた。中根千枝が「場」の共有により「つながり」が生まれて「まとまり」がもたらされ、その「つながり」がタテに連結する様を描いた『タテ社会の人間関係』（1967）に始まり、複数の場所への所属というヨコ社会の「つながり」を強調した米山俊直の『日本人の仲間意識』（1976）の研究は、さらに「社縁」の研究へと発展した。これら「公的」な「男性社会」の研究に対して上野千鶴子は、女性達の「私的」な活動における選択から作り出された「女縁」による個人的な「つながり」を明らかにしている（上野 2008）。しかし、近年流行語と

なった「無縁社会」では、個人が「つながり」の基点にならずに孤立することで「へだたり」を作り出すとも指摘される（p.18）。

こうした欧米、日本の人類学の「つながり」研究を批判的かつ発展的に継承しながら、本書の執筆者らが出会った人々の紡ぐ「つながり」の民族誌が各章で展開されている。

前半の第１章から５章までは、東アジア、東南アジア、そして東ヨーロッパにおけるデータを基に、従来の親族研究の再考を促す論考が続く。

川口論文では、中国東南部の一村落で宗族と他のマイノリティの集落を結ぶ小道の封鎖をめぐって起こった乱闘未遂事件を取り上げ、そこから明らかになる両者の「へだたり」の背後に、人類学的幻想と否定されてきた「宗族」のマジョリティ意識が大きく影響していることを明らかにしている。共産党による宗族の解体の後も既存の居住ユニットを踏襲して人民公社が編成されたために、意識のレベルでは父系出自の概念は維持され続け、「歴史」「文化」として国家公認されることで宗族意識は高揚してきた。しかし、全ての組織が復興したわけでなく、その意識も状況依存的に、かつ構築的なものであると川口は述べる。次の上水流論文は、新聞に掲載された葬儀・告別式の案内通知を資料に、台湾漢族の親族関係という「つながり」について考察している。漢族社会は人類学的に父系社会の代表例とされ、かつ族譜などの文字資料が父系の漢族社会を支えてきたとされる。しかし、上水流は植民地期以降の膨大な新聞資料から父系出自集団の正式成員ではない娘、娘の夫や子供といった女性を媒介にしてつながる人々の存在に注目し、その掲載数、掲載率や変動から彼女らの存在が小さくないことを示す。従来「へだて」られていた女性の存在を息子同様に「つながり」の中においてみることで、これまでの親族論における父系血縁イデオロギーへの偏向を上水流は指摘する。続く玉城論文では、近世末期から近代の沖縄において移動する百姓層の兄弟間のやり取りという「行為」から地域間のまとまりが形成される過程に注目し、従来の「血」「胤」といった象徴の親族論と異なるアプローチをとる。従来「百姓」と「士族」に「へだて」られてきた区分の見直しを図り、安定した社会組織である琉球近世の各地域社会が近代化の過程で自立性を喪失していくなかで、祭祀や系譜により自らの秩序の再編成を行ったと論じる従来の研究者

の門中化論に対し、近代化の過程で兄弟間の結合や協力という戦略をとることで地域間のまとまりを形成したことを玉城は明らかにしている。

杉本論文は、現代ルーマニア農村における牧畜の経営体「ゴスポダリエ」に注目し、玉城論文同様に生産現場の社会構成や労働関係、さらには生産物のやり取りを具体的に考察する。これまでの農村・農民研究における「モラル・エコノミー」論争から脱し、どのような「つながり」がどのような場面で活用され、さらにどのような意義を持つのかを明らかにしながら「ゴスポダリエ」自体を問い直してみると、かつては親族、近隣、友人関係のなかでの労働の互酬性や贈与によって成り立ってきた「ゴスポダリエ」が、都市化や産業化の進展により賃労働へと変化するとともに、親族の一部や近隣、友人関係は「へだて」られていく。しかし、「手伝い」として金銭を介さない労働扶助は、親子、キョウダイ関係を軸とした「ファミリエ」という「つながり」の中に維持され、その「つながり」にある人々が生産物にアクセスする権限を持ち続けている。続く吉田論文は、北ラオスの農村における妊娠・出産・育児、さらには親の世話という親子間の「養い」に注目し、近代医療や家族計画の浸透、少子化・青年層の移動などの変化の中でいかに対処しながらどのように親子の「つながり」を継続しているかということを検討している。短期間の急激な社会的変化に世代間の長期間の「養い」を掛け合わせて考察することで、居住を共にする場合に親から子、子から親への「養い」という見返りのない相互行為が自明視される一方で、都市へ移動し別居した親子・兄弟間においても金銭的援助、手伝いといった相互扶助が重視されていることが明らかになる。

後半の第 6 章から 9 章にかけては、移民ネットワークおよび移動者・移住者の「伝統」が作る「つながり」について論じている。

二階堂論文は在日コリアン一世の女性のライフヒストリーを通じて、識字教室に通う彼女らが主体的に取り結んできた社会関係に注目することで、父系親族と社会的紐帯や宗教活動を通じたネットワーク形成といった従来の在日コリアン研究を相対化している。貧困、そして儒教社会におけるジェンダー規範から非識字となった彼女らの日本での生活史、そして阪神・淡路大震災を契機に神戸各地で始まった識字教室を起点としながら、在日ネットワー

ク以外の日本人との社会関係を紡いでいく様子を丹念に追っている論考である。続く渋谷論文は、フランス在住のモロッコ移民と母村との間の「うわさ」の「やりとり」をとりあげ、両者がうわさをコントロールすることでいわば最適な「つながり」を維持していることを明らかにしている。移民が母村の親族に送金をする・しない（できない）ということは、「名誉と恥」という観念体系を担い、一定の規則の中で競い合われる名誉という文脈から説明される。しかし、移民にとって負担の多い送金が滞ることもある。それに対して母村の親族が不満を持つことはあっても「うわさ」にならないように注意しなければならないし、過度に要求すると移民の経済が立ち行かない。移民側も、差別からフランス社会に帰属しきれないため、送金を通じて「名誉」を維持しつつ母村とつながりを持ち続けている。こうして両者が適度な「つながり」を形成している。

松本論文は、ナイジェリア都市部イボ人移民社会における王位創造を事例に、王位を媒体としたネットワークが移民たちの《つながり》に与える影響について、相互扶助や安全保障を目的とした従来の同郷団体と比較しながら論じている。母村のイボ社会では植民地期の政策を契機として、今日政府の承認の下で権威者である「エゼ（王、伝統的統治者）」が存在する。1980 年代後半にイボ人の移民社会で移民の文化的代表たる「エゼ・イボ（イボ人の王）」が創造されはじめ、彼が伝統的行事であるヤムイモの収穫祭を主催することで故郷とのつながりを維持・再構築している。本家「エゼ」からお墨付きを得て政治経済的な有力者となる場合もあるが、故郷では国家承認のない「エゼ・イボ」に対し「イボ文化の粗悪化」との批判もある。松本はこれらの動きに対し、今や「伝統文化」となった故郷の王政を移民先で疑似的に作り出すことで移民が新たに故郷とのつながりを創造する一方で、移民社会の王政が故郷の王政と等しい価値になった時にはそれが故郷とのつながりを断ち切る作用もあると指摘する。続く久保田論文は、アラスカ州南西部の先住民ユッピックが様々な地域で参加するダンス・イベントを事例に、先住民同士だけでなく非先住民をつなげるツールとしての先住民のダンスについて考察する。キリスト教宣教師らによって禁止され衰退した先住民のダンスは 1900 年半ばから復興し始め、1970 年代後半以降は学校教育へ導入とともに、

新たなコミュニティ・イベントとして復活し、アラスカ州以外にも広がっていった。従来、こういった先住民のダンスは先住民の政治的パフォーマンスとして位置づけられていた。しかし、久保田はダンスが既存の社会関係を維持・強化しながらも親族以外に開かれた広い社会関係という「つながり」を作り出していく様を明らかにしている。

2「つながり/*Tsunagari*」とは

以上、序論と各章を概観してきたが、それを踏まえて、ここでは本書独自の「つながり」について考えてみたい。

序章冒頭でも示されているように、本書で使用されている「つながり」はカーステン（Carsten 2000）を引きながら“relatedness”と訳されている。しかし、本書の英題は“Cultural Anthoropology of *Tsunagari*”となっている。序章の最後で編者は、「出自」や「リネージ」のように過去、親族理論の文脈において記述し、分析を加えてきたエティックな概念ではなく、日常の生活の文脈において記述し、分析を加えてきたエミックな概念をその固有性を捨象することなく、いわば個性を失うことなく、エミックな文脈を離れて使用可能な概念として洗練させていく必要性を述べている。そこからさらに、“relatedness”や中国語の「関係（guanxi）」と対比し、共通点と相違点を明らかにする作業が待っているのではないかということが示唆されている（p.25）。

評者は、その「つながり」についてもう一歩進んで概念化するために必要なのは、編者も挙げている「へだたり」ではないかと考える。それが強く示唆されていたのが、二階堂論文である。

やや長くなるが、ここにそのエピソードをあげてみよう。二階堂が聞き取りを行った在日コリアン一世の女性の一人・文さんは、兄夫婦にヤミ酒の収入を独占され、一銭も手渡されなかった。彼女は兄夫婦に苦言を呈することもできず、彼女の夫は酒を飲んで暴れた。そんな兄夫婦から独立するために、炭焼きの仕事をする際に、親族とではなく日本人との社会関係を築いたことが強調される。戦後、北朝鮮への帰国運動が隆盛を極める中で兄夫婦は帰国を選択し、文さん夫婦は日本にとどまることで兄夫婦との断絶は決定的とな

った。

こうして、戦後まもない頃、文さんは家族の生活を再建・維持するため、夫方親族との断交を図る一方で、日本人との信頼関係を結んで支援を得ながら、生き残りの道を必死で模索していったのである（p.228）。

ここで評者が強調したいのは、日本人との「つながり」ではなく、夫方親族との「へだたり」である。つまり、「つながり」という概念は「へだたり」と対にして考えるべきではないのだろうか。もちろん、序章において何度か「つながり」について説明する際にキーワードとして「へだたり」が用いられていることはすでに述べた。しかし、「『つながり』あるいは『へだたり』」、「『つながり』の一方で『へだたり』がある」（強調点評者）というような表現が用いられている。つまり、「つながり」か「へだたり」の「どちらか」という意味である。そうではなくて、「つながり/へだたり」を同時に考える必要があるのではないか。

そのことが詳細に考察されているのが、渋谷論文と松本論文である。移民による母村への送金の滞りや少なさがうわさとして外に出ないようにコントロールされていることについて、渋谷はジンメルの「秘密を持つことは、両者が近づきすぎないように配慮することである（ジンメル 1994）」という言葉を引きながら、移民と母村の親族の相違が顕在化し分裂をきたさないように、相互がうわさをコントロールすることで両者の間に距離を置き、国境を越えた社会関係（つながり）を維持していると論じている（p.262）。つまり、適度な「へだたり」が「つながり」を維持しているのである。松本論文では、移民王政がイボ人移民と「つながり」を生み出す一方で、故郷の王政と同じような権威をもったときに、故郷に目を向ける必要がなくなり、故郷の発展に寄与する動機も減じてしまうことで「つながり」を断ち切るとも指摘する。それは「つながり」のもつ「もろ刃」のような作用であり、「つながり」ながら「へだた」っているという状況を生んでいる。この「つながり/へだたり」を頭に入れながら、久保田論文を読んだときに、踊る場所によってその様式に差異

が存在しないダンスであっても、村を離れるとダンスの場での「からかい」、そして大規模な贈与や料理をふるまう「もてなし」が行われることがないことから、ダンスの本来の意味から違った意味を持ちはじめることが分かる。と同時に、村の外で村を離れた移住者と村民がともに踊るイベントでは、ダンスによって故郷との「つながり」を確認するし、エスニック・マーカーとして先住民と非先住民を「へだて」てきたダンスが、非先住民に招かれて先住民が踊るときには、非先住民が先住民の「もてなし」を流用することで、両者に新たな「つながり」を作る。すなわちダンス自体が「つながり」と「へだたり」を作りだしていると言える。

このように「つながり/へだたり」について考えると、移動・移民を対象とした社会ネットワーク研究は、初めから「移動者/故郷・母村」という「へだたり」を背景として「つながり」を見出そうとした点で、必要以上に「つながり」のみを重視してきた個別社会内の親族研究を相対化するのではないだろうか。そう考えると、本書前半の各章でも、親族に加えて、非親族、性別、近隣、友人関係、国を超えた「へだたり」から「つながり」について各執筆者が論じているものの、もう一歩踏み込んで「つながり/へだたり」を考えることで、本書独自の「つながり」について概念化する作業ができるのではないだろうか。

おわりに

親族について論じるとき、「人間関係」を「紡ぐ」という言葉が用いられるように、人と人の間の関係には「糸」が比喩として用いられる。「糸」と一言で言っても、一般に細くて長いものを「繊維」と呼び、一本または複数の繊維が束になり、長く連なったしなやかな綿状物体になったものを「糸」と定義している（松本 2011）。繊維が絡まって平面上になっているものをウェブ（web）と呼び（大越 2011）、こちらはウェブ・サイトのウェブの語源となっている。しかし、糸にしろウェブにしろ、ミクロ単位で見たときにそれらは、隙間、すなわち「へだたり」を持っていて、その隙間の空気が保温性を

高める（森川 2011）。天然繊維のうち、絹・麻などはさらっとした手触りを持っているが、繊維の断面は三角形に近い（福井県繊維技術協会 1974）。つまり、三角形の角が隣の角と隙間をもって連続しているからこそ、滑らかさを持つのである。しかし、人が絹や麻の生地を触って滑らかさを感じているとき、繊維の持つ角と隙間は意識されない。つまり、人が人間関係の比喩として「糸」を用いてきたということは、「糸」すなわち「人と人」が持っている「つながり」とともに「へだたり」について考える道筋が、実は最初から織り込まれていたのではないのだろうか。

参考文献

（日本語）
上野千鶴子
2008『「女縁」を生きた女たち』岩波現代文庫
大越豊・森川英明
2011「第 1 章　世界は繊維でできている」信州大学繊維学部編『はじめて学ぶ繊維』日刊工業新聞社
ジンメル，ゲオルグ
1994（1908）『社会学－社会化の諸形式についての研究』居安正訳　白水社
中根千枝
1967『タテ社会の人間関係－単一社会の理論』講談社現代新書
福井県繊維技術協会
1974『福井県繊維産業技術史』福井県繊維技術協会
松本陽一
2011「第 3 章　繊維製品を作る　2　糸をつくる」信州大学繊維学部編『はじめて学ぶ繊維』日刊工業新聞社
米山俊直
1976『日本人の仲間意識』講談社現代新書

（英語）

Carsten, Janet(ed)
2000 Culture of Relatedness : New Approaches Study of Kinship. Cambridge University

注

[1] ここでいう批判は、2011 年 6 月に法政大学にて開催された文化人類学会研究大会の若手懇談会にて東日本大震災について語る会が行われた際に、参加者らによって呈されたものである。隣接諸分野が次々と震災をテーマにした研究を発表する中で、各々が何か貢献したいという苛立ちから発せられた批判ではあるだろう。しかし、これらの批判について、評者と本書の編者の一人である沼崎氏との会話の中で氏が語った「震災はまだ終わっていない」という一言につきると評者は考える。つまり、震災から二年がたっても現在進行形で続く被害に対して、急場ではなく個々が長い期間をかけて積み重ね、問い直すことで社会に貢献する研究を続けていくべきではないだろうか。

(ochiiku@gmail.com)